

あの冬の日曜日の午後、私は時間の境界を超えた。二月になつて春の気配がかすかに感じられるころだつた。しかし車で二、三時間走つて到着した鉄原は、いまだ荒涼とした冬だつた。灰色の空をかたくなに切りさく山脈のふもと、霜のおりた広野には、ワシたちにささげられた牛たちがころがつていて、陰惨なカラスの鳴き声が呪術のようにとび交つていた。

その広野のはてに、巨大な墓碑があつた。銃弾のあとが刻みつけられた大きな建物の名は、朝鮮労働党鐵原郡党舎。私の知る現実と時間の境界のなかに、そんな名前が実在するわけがなかつた。

そこは、江原道鉄原郡鉄原邑官田里。民間人統制線〔民統線〕。民間人は許可なく出入りできず、有刺鉄線などで完全に遮断されている」の内側の、まさに忘れられた地だつた。

広場を見おろす大きな三階建て石造りの建物は、外形はおおかた残つていたが、爆撃の形跡がありと刻まれていた。まるで爆撃の最中に時間がとまつてしまつたようだ。建物の右側には、民統線入口の軍の歩哨所があり、建物のまえを通る二車線の道路には信号ひとつなく、埃ばかりがたつていて。建物のうしろの裏山とむかい側の山並みは、平凡そのものだつた。

どうしてこんなところにこれほど大きな建物を建てたのだろうか。いきなりそんな疑問がうかんだ。党舎のまえの説明版には、おおむねこんな説明があつた。

鉄原郡北朝鮮労働党で完成させたロシア式建物で、一八五〇平方メートルの面積に地上三階建ての無鉄筋コンクリートの建物である。建設当時、献金として村あたり二〇〇俵の米を集め、住民を強制労働に動員して、秘密保持のために内部は共産党员だけで工事した。韓国戦争〔日本でいう朝鮮戦争〕がおこるまえの共産党統治下で反共活動をしていた数多くの人びとが、ここにとらえられ、拷問をうけ虐殺された。党舎の裏の防空壕からは、人間の遺骨と針金などが発見された。

ちよつとはなれたところに、案内板がもうひとつあつた。水彩画風に描かれた鉄原郡の復元図だつた。朝鮮労働党鐵原郡党舎にはじまり鉄原駅まで、靄のかかつた街のようになかんだ絵だつたが、明らかに繁華な通りだつた。その街の風景を見てやつと、あんなに大きな建物の存在を納得することができた。いわゆる「安保觀光コース」にそつて民統線のなかまで入つてみると、その華やかだった過去の痕跡が残つていた。歯を食いしばるようにしてその形をとどめた氷倉や金融組合、からうじて礎石だけを見せていく南国民学校や製糸工場、そして灰色の石くれの山が、春の田仕事を準備するために赤土をすきかえした田畠を横切つている。爆撃でつぶれた建物の残骸が、いまは田のあぜ、畠のうねになつているのだ。最後にはひとにぎりの土に帰る私たちの生と同じように。

そのときから私は、時間の境界のむこう側の鉄原を求めてさまよつた。本を読み、論文をあさり、映

像も見た。ときには地図をたどって、鉄原の復元図の写真をルーペでのぞきこんだ。ときには、また鉄原に車で飛んで、古老をつかまえて、がむしゃらにたずねてみたりもした。

——鉄原生まれ、鉄原育ちという人はいませんか？

こうたずねると、だれもがちがうと手をふった。

——いらないよ。だれもいない。爆撃で死んだか、北にいったかだよ。

そんなある日のこと、ひとりの老人にあった。私を時間の境界のむこうにつれていてくれた、鉄原郡復元図を描いた、まさにその人だつた。老人は、生まれたその土地、つまり民統線のむこうで農業をしながら暮らしていた。日帝の植民地期に生まれ、朝鮮人民共和国をへて、戦争のさなかには米軍政統治下で暮らし、いまは大韓民国という垣根のなかで暮らしている。一生で四つの国の人として生きたのだ。

私は軍の歩哨所に身分証をあずけ、民統線のなかに入つて老人にあつた。時間の流れさえとまつてしまつたような薄暗い家でむかいあつて、分断の壁の底にうずもれている話を聞いた。そして、通行禁止時間に追われて村からでて、また朝鮮労働党党舎にいった。鉄原郡の復元図のまえに立つたとき、あたりはもう暗かつた。

しかし、私は見た。時間の境界を超えて、あの繁華だった街の通りを行き交う人びとを見た。コーヒードの袋をかかえて小走りに走る敬愛を、禁書をふところに入れて重い足どりで歩く基秀を、自尊心にみちた顔をまっすぐにあげて人力車にのる恩恵を。その一日一日を重たく、しかし熱く生きていった人びとを。

泥棒のようにやつてきた解放のその日、この街の通りを歩いていた人たちは、なにを夢見ただろうか。

新祖国建設の槌音が高らかだったあの日、希望の礎石をすえるために汗を流した人びとは、なにを夢見ていたのだろうか。そして彼らは、彼らのあの日の夢は、どこにいつたのだろうか。

私はその夢を復元したかった。その街を。その街に生きた人びとを復元したかった。この地の現代史がはじまつたあの日の夢を、復元してみたかった。南でも北でも、力をもつた人びとの恣意によつて忘れ去られた彼らの声をよみがえらせ、現代の私や私たちに聞かせたかった。これから世の中をつくつていく者たちに聞かせたかった。

私は、統一を当然のこととして受け入れる人間であるだけだ。率直にいうなら、熱心に統一を夢見たこともなく、いくことのできない北の地を恋しがる人間でもない。

しかし、鉄原で時間の境界を超えたあとでは、私はその日を夢見ている。漢拏山から白頭山まで一気に走つていけるその日を、そんなふうに大陸のあちらの国々のはてまで思うままに走つていけるその日を、夢見ている。その日がくれば、忘れられたあの地で鎮魂の歌を歌いたい。消え失せた夢のために、たしかに存在した魂のために。

この一編の物語は、その鎮魂曲の第一楽章である。どうか安らかであれと祈りたい。昨日の人びとも、きょうの人びとも。

私は幼いころから日本の少女マンガの大のファンです。美内すずえの『ガラスの仮面』、池田理代子の『オルフェウスの窓』、『ベルサイユのばら』、水木杏子の『キヤンディ キヤンディ』……。ちょうど昨日、日渡早紀の『ぼくの地球を守つて』をとうとう手に入れて、とても喜んでいるところです。

こんな想像をしてみます。少女マンガによく出てくる出生の秘密。

時は一九二七年、東京のひつそりとした住宅街に生まれたひとりの赤ん坊が、あやしい男に拉致され、おくるみに包まれて玄界灘げんかいなだをわたります。赤ん坊は自分の身分をまったく知らないまま、朝鮮の言葉を使い、朝鮮の子どもとして成長します。そのように時間は流れ、一九四五年、子どもははたして、どこの人間でしょうか？ 反対のばあいも同様でしょう。朝鮮の両班ヤンバン家に生まれた子が、日本の子どもとして育つたとしたら、はたしてどの国の人だといえるでしょうか？

韓国と日本、日本と韓国。

よく考えてみると、祖国とは私たちの選択せんたくではありません。私たちの意志は少しも反映されていません。生まれてからあたえられた、したがつて大きくいうならば運命でしょう。

一九四五年、鉄原チヨロン。

彼らの運命は、ことのほか苛酷かくでした。植民地支配と解放と分断。そして戦争。しかしこの小説は運命についての話ではありません。そのような運命を生きていく人たちの話、自らの選択に関する話です。『1945、鉄原』を書くため、私は昔の資料を調査しながら、ほんとうにひどい日本人たちをたくさん見ました。そして、それと同時に、まつたくちがう日本の顔に会いました。

過去に強制徵用ちよせいようで日本に引っ張られていき、日本の土に埋められた人たちの遺骸いがいを、発掘はつくする人たちがいます。日本人、在日朝鮮人、韓国人が力を合わせ、一八年の間に七七体の遺骸を收拾しました。二〇一五年、ついに七七体の遺骸が、七〇年ぶりに故郷に帰つて来ました。韓国と日本の多くの宗教人が、ソウル広場でともに追悼祭ついとうさいをおこないました。

私も北海道浅茅野あさの〔北海道宗谷郡猿払村浅茅野・オホーツク海に面した地域〕の発掘に参加しました。韓国人、日本人、ボーランド人、ドイツ人……。たがいにちがう国名をもつ人たちが、同じ気持ちで同じ場に立ちました。国籍と人種は私たちの選択ではないけれど、その場に立つことは私たちの意志でした。

韓国の慰安婦いあんふのハルモニ「おばあさん」たちと、ともにする日本人たちがいます。ベトナム戦で、韓国軍が犯した蛮行ばんこうを謝罪する韓国人たちがいます。両国の子どもたちが、平和の手紙をやり取りするよう努力する韓国や日本の教師たちもいます。

私たちは、日本と韓国を選択することはできません。けれども、平和と暴力は、私たちが選択することができます。暴力を楯たてにするものたちの側に立つことも、圧政に反対する側に立つこともできます。

ユートピア書店。

敬愛が頻繁に立ち寄ったその書店の主人は、日本人のツカダさんです。ツカダさんは戦争で息子を亡くした父親であり、敬愛は戦争を起こしたものたちによって両親を失くした娘です。国籍も年齢も境遇もちがうけれど、同じ痛みをもつ人たちです。同じ夢を見る人たちです。

戦争が一年早く終わっていたら、戦争がおきていなかつたら、奪い奪われることがなかつたなら、平和であったなら。それが『1945、鉄原』の夢です。またそれは二〇一八年の韓国と日本の夢です。私たちがともに夢見る未来です。

その夢をともにしてくださつた方たちに、頭をたれてあいさつをおくります。梁玉順さん、仲村修先生、オリニほんやく会の北村幸子さん、そして画家の金明和さん、ありがとうございました。そして影書房

と日本の読者のみなさんに、友情のあいさつをおくります。

二〇一八年一月一九日

ソウルで
イヒヨン